〔研究ノート〕

AIへの信託は主体性の放棄か

――AIと主体性をめぐる問いの構造――

海野　裕

はじめに

本稿は、AIの浸透が人間の主体性と倫理的判断に与える影響を定量的に検証するための調査を設計するにあたり、その理論的背景と問いの構造を整理することを目的とした論考である。実査に先立ち、何をどう測るかを議論する前に、そもそも何が問われているのかを明確にしておく必要がある。本稿はその作業に相当する。

問いの出発点は、倫理研究所が継続してきた倫理意識定点調査の長期データにある。二〇〇五年から二〇二五年にわたる二十年間の推移は、昨今のAI論議とは独立して進行してきた、ある地殻変動を記録している。主体性、自己信頼、対人信頼に関わる倫理コンセプトへの共感が、生成AIの登場以前から一貫して低下してきたという事実である。この文脈を踏まえることなしに、AI依存と主体性の関係を問うことは、問いの半分を見失うことになる。

以下、一章でその長期データを示し、二章で本調査の問いの構造を整理する。三章では主体性という概念そのものを問い直し、四章で依存の様式と人間像を類型化する。五章では倫理的責任の所在という問題に踏み込み、六章で調査設計の概要と仮説群を示す。「結びに代えて」では、本調査が最終的に問いかける射程を論じる。

一、二十年の地殻変動

データを前にして、まず問わなければならないのは「いつから始まったのか」という問いである。

倫理研究所が継続してきた倫理意識定点調査は、二〇〇五年から二〇二五年にわたる二十年間の推移を記録している。その長期データが示す事実は、昨今のＡＩ論議とは独立して進行してきた、一つの静かな地殻変動である。

「主体性を持つこと」への共感度は、二〇〇五年の七八・四％から二〇二五年の六九・五％へと、二十年間で八・九ポイント低下した。「自分を信じること」は八三・〇％から七二・七％へと一〇・三ポイント低下し、「他人を信じること」も同じく一〇・三ポイントの低下で四七・五％まで落ちている。「希望を持つこと」は一二・三ポイント、「勇気を持つこと」は一三・八ポイント、「嘘をつかないこと」に至っては一四・〇ポイントの低下を記録した。

これらはいずれも、生成ＡＩが一般社会に浸透する以前から始まっていた変化である。ChatGPTが公開されたのは二〇二二年十一月であり、その後の急速な普及はまだ三年に満たない。しかし主体性や自己信頼、対人信頼の侵食は、その遥か手前から静かに進行していた。